

松根東洋城

臨終へまで

臨終へまで

漱石先生の「死」と自分との関係は、早稲田の先生の家
の勝手口の障子の引手から始まる。

というのは自分が先生の「死」を予感したのがその際
であつたからだ。尤も予感とまではいえないのでが他に
言葉を知らないし、又後になつて考えると、ほんのその
刹那の何とも言えない心持が、すぐ消えて跡方もなかつ
たに拘らず異常なものであつたからだ。

十一月の十六日頃からすこしずつ又胃の工合がよくな

く、それでも褥に就かれるほどではなく家人も御自身も又持病が起つた位に思っていたのが、一週間経過するうちにどうもこれまでのとは様子もちがって良くな
く、医師も真鍋君を始め多勢で診察し、色々発作もあり、二十九日という頃は大分険悪な兆候を現わして来た。報を得て自分も宙を飛んで駈けつけた訳だ。そこに勝手口の障子の引手が出現する。——それは大凡下の、当時綴った『終焉記』の中に自分は書いている如く。

「事態唯だ太だ軽からず、若しかの修善寺の時の如きやなど想いめぐらす。——先生の病起る時の精神状態も又

さる場合の心得も知りたれば、玄関に到り、こは表よりして出入の戸の音先生の神経を刺激してはよからずと思ひ、わざと池垣をめぐりて勝手口の方に廻る。いかなる心の働きにやその障子に手をかけし其時急に心するときめき何かしらず頓に不安なる心に襲われたるもあやし。唯だ是れ数瞬の事なれども中々に烈しき衝激なりけり、何の幻影なりけむ。やがて心落ち居て障子をあげ茶の間に通る。灯、明か明かと四五の座席やや乱れて人はあらず。——此時、いつも坐る炉辺、飯をくう茶ぶ台、いつか泥棒が中の物を持ち行きたる箆笥、いつも一時間程進

ませある時計等斯かる常の物まさに眼に映りて常と些かも異なる所なし、唯だ一間を隔てし書齋に先生は静に横臥し居らるるのみ。と思うに、今さ躍りし心も落ち居、その風の影の如く過ぎたる怖れの心をなかなかにあやしき心地す。静かさ明るき灯の下に満つ。この静かさよく書齋の静けさに続き、病みて臥し給える師の姿面輪も眼前なり。思いの外に衰え給わず、など誰れ想えとてか自らさ思われる心地す、又一時の騒ぎに終れと念ずる故のみにあらざるが如し。」

そこへ主治医の真鍋君が出て来た、自分は同君と話を

する。『記』に「余の顔を見るや弱つたと繰返して止ま
ず、次で病況の事に及ぶ。君は中学時代の旧友先生の相
弟子たり、毫も意を隔つる事なきを以て互に言う所を言
う。始て委しく大患の容易ならざると知り或は万事休す
やと思う、目前の炉と卓と筆筭と直に心頭に滅して彼の
勝手口の障子に手をかけし時の心又倏忽として蘇り来
る。心機急鐘を乱打して大事唯一に真鍋の舌頭にかかる
を覚ゆ、真鍋顰すれば我眉顰し真鍋悲観すれば我心卒に
阻喪す。」

ここが引手の予感に値する次第である。なぜというに、

一体先生の病氣！　それは随分幾度ものことであり、しかもその何回もが可也大病ではあったのだ。そしてその最ひどい一つがああの修善寺の時のそれであつたがそれは痛氣の始から一緒に居たし、其他の場合でも又度々の事で随分我々の驚愕心が衰滅しても居、それに何よりも玄関をわざと勝手口に廻るといふこういう場合の経験を数多く持っていた自分として、別に今度に限つてこの障子の引手に眼鼻でもついた様な驚異を感ずる筈もない訳なのではある。それがそうでないから只だ事ではなかつたのだ。つまり、勝手口の障子に手をかけた時の一瞬の

心のときめきは、その障子を引きあけることによつて一たびは消え、更に真鍋の形容と詞端とにつれて又閃いたのであつた。しかしそれでもそれはもうそう長くはつづかなかつた、そして心配し痛心はしつづけたものの結局今一度はどうしても回復せらるるものと信じて疑わなかつた。それは仕舞にとうとう我等の所信を裏切つて悲しい終末が到来したとはいえ、その際までは。

これは二十九日の事であつた。これから翌月の九日まで旬日の日時が流れ病勢はいよいよ進んだが、それに拘らずそういう予感めいたことは一つもなかつた。それよ

りも却て病愈革まらんとして一頓挫しやがて回復の曙光を認むるのであることをのみ夢みていた。想うにこれは「死なせたくない」「生きてて呉れなくちやいけない」という心が是が非でもそつちへ引張って行くのであったらしい。此心は又やがて養痾上の或要件を決行する為めの幾分の地をなして呉れたらしい。それは面会謝絶に就てである。

主治医真鍋と自分とは最も無遠慮に話し合い得る間柄であつたから真鍋の主張を土台とし主に二人の相談に依て面会謝絶を励行することにした。それには随分困難が

あつた。即ち、一たび先生に見えたいまみ、という人々の切なる人情である。が、その為に起る病人の神経の興奮や談話による内出血増進の危険を考慮しては、どうしても此際「逢いたい」という個人感情の満足は後廻しにし、「病気を直す」「先生を生かす」という当面第一の重大問題にひたと立ち尽くさねばならないので、此情と理との間に処しては可也苦衷を致したものだ。日夜を重ねて襖一重のこなたに犇々と恩師を氣遣う人々の中には已に色に現わるる向きもなかりなかつた。第一に自分自身内心で逢いたい逢いたいといひ乍らいけなしいけなしいと

叱っているのだ。後になつて見ると抜けて病室に入った一二の人があつたようだが、それでも大方は食いとめることが出来たのは先ず自ら室に入るまいとの決心を先立てての事であつたらう。此強い決心には、意識はしない乍らどうもその心の底の底に、「結局先生は直る」と叫ぶ或者があつたのにちがいないと思う。

超えて九日、我等の望も願も我等の予想も所信も根底から覆されて大事はとうとう切迫してしもうた。三回の大きな内出血は遂に人生の生き行くべき勢力の大方を傾け尽してしまった。『終焉記』はこう書く。

「……正午の頃おい真鍋心甚だ騒ぐが如くにして謂つて曰。もういかん。と。——乃ち兎女弟子一同生前に先生に謁するの事を行ふ。我等一人進み一人退き交る交るに謁す。我等先生に見えざる已に久し、而も襖を隔てて護ること十幾昼夜ぞ。此間声咳只だ他によりて間接に接するを以て満足するもの偏に先生の命をとりとめんが為なりき。今殆ど闔を排してまろび入り蒼惶その温容に触れんとするや、我等の前には声色已に師在まさずして枯骨空しくむくろと横わるのみなるを、まして遂に歸らざる旅路にやがて出で立たんとし給うにあるに於ておや。瘦

せ給いしかな御面輪、衰え給いしかな御気魄、蓬髮蒼顔、
懐かしき其口語らず親しき其眼見ず、世の何物をも失い
果て給いしうつろ木の唯だうつろなる君が心、呼ばんに
甲斐なく覚まさんに術なきを、見まもれば幽かなる弱き
呼吸彼の死海の静かなる汀に打よせ引退くばかりなり。
わが胸つぶれわが心乱る、千万無量の感をいずれのそれ
ともわきかぬれど唯だ一拝にまとめ得て退く。苦悶の狂
風怒濤の御あと見えぬにいささか安くおわすやと思うだ
に畏し。もとより病褥の乱雑はややあれど、掛額机書棚
書斎の調度の皆の毫も常と変らぬに、今やあるじは虚明

に彷彿して紳琴無弦に断絶せんとす。肅として寂しき心を抱きて罷れば、縁の外なる彼の芭蕉緑葉已に破れて朧月の風雲亦悲めり。時に午僅に数分前なり。」

こうして午から夕へ。六時過ぐる頃よりの発作はついに起り得るそれのいよいよ最後のものとなった。一同は時を移さず病床をとりまいていた。そうして……。「終焉記』は記す。」

「……今はとて夫人子達一々末期の水を捧げ給う、我等も相次ぐ。一管の毛錐詩文に彩るにあらず白毫水を啣んで描く所そも何の画図ぞ。筆を進めでまさしく見る先生

の面輪、其の髭其の口其の唇其の齒、筆の穂の一滴水に先生、私の総てをありと享け給え。……」

かくて、大正五年十二月九日午後六時五十分！という日時は、その一分前の四十九分とその一分後の五十一分とが来又来るように、極めて無異に極めて尋常に静に到来して又静に過ぎ去って行くのであった。

×

×

×

終に一つ、下の様な贅言を書きそえることを許してもらいたい。

俳聖松尾芭蕉、その女性の弟子園女が許に遊び饗応の

菌を食うてより泄痢を起し腸を病むこと十有四日、此間門人木節の診に托し多くの門弟縁故に護られて、元禄七年冬、風寒き或日の夕方に物故す、齡五十一。

文豪夏目漱石、その女人の弟子山田夫人の招宴に応じ落花生を嚙つてより吐嘔を催し胃を病むこと十有九日、此間弟子真鍋を主治医とし多くの家人弟子達に護られて、大正五年冬、天曇る或日の日没に逝く、年齒五十。

事の偶然とはいえ、あまりにも相似たる此二偉人の終焉の発端よ。更に、殊にはその孰れもが優にやさしき女性に色彩に染められていることの、それが翁であの先生

であるだけに一入もののあわれも深く、それ処でなく寧ろ百歩を進めて何か人間には本人さえ気もつかぬ窺い知れぬ頗る奥深い因縁の世界を背負うているのではあるまいかと思わせらるることよ。

日本文学電子図書館

臨終へまで

著 者：松根東洋城

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館